

オラン・ジユパン

ジャワ、スマトラ ■ 残留日本人を訪ねて

権 二郎

長征社

オラン・ジユパン

ジャワ、スマトラ■残留日本人を訪ねて

権 二郎

長征社

Our
War
Japan

権 二郎 (ごん じろう)

1956年大阪生まれ。写真家。この10年あまりアジアを中心に取材活動が続けている。写真になりそうなものなら何にでもカメラを向けるが、興味の中心は「人間」であり、人びとの暮らしを題材とした作品を雑誌や写真展などで発表している。日本写真作家協会会員。

主な写真展:「裏通りの中国人」(1991年札幌、銀座、新宿、大阪、福岡各キャノンサロン)「ネパリーハル」(1994年銀座、大阪、高知)

オラン・ジュパン

ジャワ、スマトラ ■ 残留日本人を訪ねて

発 行 ■ 1995年 8 月25日

著 者 ■ 権 二郎◎

発行者 ■ 市山隆次

発行所 ■ 長征社

神戸市中央区北長狭通5-8-6

電話 078(371)6491

振替 00930-9-15755

印刷・製本 ■ 大阪書籍株式会社

●定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はお手数ですが小社あてお送りください。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-924929-15-8

はじめに

私はアジアに魅かれる旅人のひとりである。知っていそうで知らないのがアジアの国々であり、それでいて、やはり親近感があるからか不思議とやすらぎを覚えることが多い。バスに揺られて、安宿に泊まって……、そんな旅をもう何年続けているだろう。そろそろ、バックパッカーというには不似合いな年齢にさしかかっているが、暇をこしらえては小さな荷物を背負ってふらふら家を出て行く。

そういう私がインドネシアを旅した。そして、長らくそこに暮らしている日本人を訪ね歩いた。その旅の話をこの本に書こうと思う。タイトルの「オラン・ジュパン」はインドネシア語で日本人のことである。

私が訪ねた日本人は「残留軍人」あるいは「残留者」などと呼ばれている。「残留」という言葉にはどうにも冷たい響きを感じるが、先の戦争で皇軍兵士として外地に送られ、終戦になってもさまざまな事情から日本へは帰らず、現地に留まってその後の人生を歩んできた人たちのことで

ある。もともと、そのほとんどがインドネシア国籍を取得しているので、正確には日系インドネシア人であり、戦後五〇年が経つ今、皆七〇歳を越えている。

この旅のきっかけとなったのはロシッドとの出会いである。ある年、正月休みを利用してジャワ島のジョクジャカルタを訪れたときのことだ。真冬の日本から急にやって来たものだから暑くて暑くてやりきれず、近くの山に避暑地があると聞いてたまたま泊まった宿の老主人が彼だった。「アダ・カマール（部屋はありますか）？」

と覚えてたのだとどかしいインドネシア語で訊く私に、

「いやあ、日本の方ですか」

といきなり日本語で話かけてきた。

「インドネシアは暑いでしょう。でも、ここは朝晩は寒いくらいですよ」

おどろいた。それが、とても自然な日本語だったからである。インドネシアに限らず、世界中、とくにいわゆる観光地には日本語を話す人がけっこういる。中にはかなり上手な人もいる。しかし所詮、外国人の話す日本語というものは、意思の疎通はできても発音やアクセントや表現が必ずどこかおかしい。ところが彼の日本語にはそういう変な部分がまるでないのである。

聞けば、はたして彼は日本人だった。函館で生まれたという。ジャワへやって来たのは戦時中、軍関係の仕事のために、以来現在まで一度も日本へ帰ったことはない。終戦後、軍から帰還命令が出たが、それには従わなかった。そして、その後一九四九年末まで続いたインドネシア独立戦

争に参加し、独立後は一民間人となり、ここで宿をはじめもう四〇年以上になるという。もちろん結婚もしているし、子供も孫も大勢いる。彼はあまり多くを語ろうとしなかったが、これまでもずいぶん苦労してきたようだった。

驚いたことに彼は、自分と同じように残った日本人は他にもたくさんいたという。そして、「しかし、もうこれだけになってしまいました」

と今もインドネシアに暮らしている残留者の名簿を見せてくれた。数えてみると九一人。その住所はジャワ島やスマトラ島のアチコチにちらばっている。

私は旅のつれづれに、のんびりした町のようすやそこで穏やかに暮らしている人びとを見てみると、ふと、「ここで旅をやめて、このままこの土地でくらししてみたいなあ」と思うことがある。もとより、それは旅人の気まぐれであって実行する勇氣はない。言葉さえおぼつかない異郷の地で、金もなく何の後ろ盾もないひとりの人間が生きていくというのは並大抵のことではない。だが考えてみれば、ロシッドたちはまさにそれをしぶとく実践してきた人たちではないか。そう思つてフセイン、ウマール、アリなどと現地名の綴られた名簿を眺めていると、未だ会ったことのない彼らではあるが、その生き方に驚嘆や尊敬や憧れの入り混じった気持ちを感じた。

ただ外国に生活するだけなら今日ではそう珍しくない。ゴマンという。いや海外在留邦人は数十万人に上ると記憶する。しかし、その多くは本当の意味でその国で独り立ちして生活しているとはいいがたいのではないか。例えば企業の駐在員やその家族なら会社というバックがある。日

本人の同僚もいるだろうし、現地人のスタッフにしても日本人との関係に慣れた人たちであろう。ニューヨークやロサンゼルスにはリトル・トーキョーと呼ぶ日本人町があって、その中では日本の食物も新聞も日本語で書かれた現地の情報誌さえも手に入る。食事も買物も日本語だけで済ますことができる。企業進出の多い東南アジアでも、日本人は日本人のソサエティーの中で生活していると聞く。

それが一概にいけないというつもりはない。だが、それでは本当の意味でその国で暮らしたとはいえないのではないだろうか。こういうのは旅に例えればパック旅行のようなものである。まわりはいつも日本人だらけで、仲間うちで食事のテーブルを囲み、グループ内だけの会話を交わし、必要な情報は日本人の添乗員や日本から持参したガイドブックで済みます。旅を娯楽と捕らえるならば、忙しい日本人たちがそういう選択に行き着くのもよくわかる。しかしそのような日本人を見ていると、どこかしら日本の経済力をバックにしているようで傲慢な気がしてならない。

ロシッドたちは、そういう生き方をして来たのではない。いや、したくてもできなかった。彼らを同じように旅人に例えるならば、十分な所持金も帰りの切符も持たず、カバンひとつでいつ果てるとも知れない長い旅に出た旅人ではないだろうか。このような旅人にわがままは許されない。現地の食物を食べ、言葉や習慣を覚え、万事、郷に入っては郷に従えでないとやっていけない。トラブルが起きても、札びらを切って処理することはできない。現地の人との出会いを大切に、いつも誠実に行動しなければ誰も相手にしてくれない。何があっても諦めないしぶとさ、

ときには図太さも必要である。

でも、そういう旅人にはきつと人びとが心を開いてくれる。困ったことがあったら喜んで助けしてくれるに違いない。そして、そんな旅人はバック旅行者の何十倍もその国を知り、何百倍もすばらしい思い出をつくるに違いない。「人生は旅」というのは言い古された言葉だが、いつも心のどこかで故郷のことを思い続けてきただろうロシッドたち残留者は、人生という長い長い旅の旅人だと思う。私はそんな旅人に会ってみたいと思った。

それからしばらくして旅を始めた。初回は一九九四年一月のことで、スラバヤを基点としてジャワ東部をまわり、以降四月にジャカルタ、七月にジャワ西部・中部、翌年一月にスマトラをそれぞれ訪れた。全部で四回、延べ約二カ月に亘る旅だった。本文中の年齢などはその当時のものである。そして最後の旅から帰ってちょうど一週間後、あの大震災が起こった。

旅は、今になって思えば、残留者たちを訪ねながらも道中の諸々について興味を示す寄り道の多いものだった。町角や乗物や宿屋で出会った多くの人たちに助けられて私は旅を続けた。とくに残留者の皆さんには、バスターミナルまでわざわざ迎えに来ていただいたり、事前の連絡ができず突然お伺いして驚かせたり、話を聞くうちお昼時になって食事を御馳走になったり、あるいは夜遅くなって泊めていただいたりと、ずいぶんお世話になり迷惑もかけた。ここで、あらためてそのお礼とお詫びを申し上げておかねばならない。

結局、私はつぎに掲げる全部で四五人の皆さんを訪ねた。

安藤万次郎・大正一二年秋田県（生まれ）／相沢嘉一郎・大正一一年東京都／伊丹秀夫・大正一二年大阪府／岩元富夫・大正六年鹿児島県／石井淑普・大正一一年佐賀県／小野寺忠夫・大正五年岩手県／乙戸昇・大正七年東京都／鹿毛等・大正二年福岡県／喜岡尚之・大正六年香川県／下岡善治・大正一四年京都府／※勢理客文吉・大正七年東京都（硫黄島）／田中年夫・大正六年福岡県／中川義郎・大正七年東京都／藤山秀雄・大正一一年佐賀県／宮原永治・大正一一年台湾／石川芳夫・大正二年茨城県／井上助良・明治四三年愛媛県／衛藤七男・大正八年大分県／加藤慶明・大正一五年大阪府／笠原晋・明治四二年神奈川県／吉良勝利・大正七年愛媛県／千代森道治・大正六年鹿児島県／※難波行雄・大正九年岡山県／羽田万蔵・大正一五年ジャワ島／※森蔭轟・大正七年兵庫県／※本坊高利・大正一〇年宮崎県／志田安雄・大正一〇年宮崎県／田中幸年・明治四〇年北海道／堀井豊・大正一〇年大阪府／石井正治・大正五年北海道／大塚秀雄・明治四五年大阪府／北村亮一・大正六年兵庫県／砂川春一・大正九年沖縄県／林源治・大正四年兵庫県／※前川辰治・大正五年新潟県／町田宗栄・大正八年沖縄県／小野盛・大正七年北海道／落合重五郎・大正九年宮城県／小平良一・大正六年栃木県／巽時義・大正一〇年台湾／武藤守・大正一二年愛知県／石黒小三・大正四年愛知県／白川正雄・大正一一年山形県／鈴木秀雄・大正五年秋田県／矢川芳夫・大正一一年和歌山県（敬称略・順不同）

皆さんからはじつに多くの話を聞いた。だが残念ながらその半分も本書に書くことはできず、せつかく貴重な話を聞かせてもらった方たちに対して心苦しく思っている。また、※印のついている方は、私が訪ねたあと惜しくも故人となられた。ご冥福を祈りたい。しかし、皆さんから聞いた話の数々は今も私の胸中にずっしりと留まっている。今後、また何か別の機会に著したい。本文では、残留者の皆さんを表すのに、ここに掲げた日本名ではなく現地名を用いた。長年インドネシア人として暮らしている人たちを呼ぶにはその方がふさわしい気がしたからである。その際、読むうえでの煩わしさを避けるため敬称は省略させていただいた。ご諒解いただきたい。最後に、この旅で訪ねることができなかった方を含め残留者の皆さんがこれからの人生を安らかに、かつ楽しく過ごされることを心から願ってやまない。本書をまとめるにあたり多大なるご尽力をいただいた長征社の二人に感謝する。

一九九五年七月、幸いにして震災の被害を免れた北神戸の自宅にて

目次

はじめに ————— 1

ミー・バソ ————— 14

百曉先生の工場 ————— 26

マドウーラ ————— 34

二つの戦争 ————— 53

ジャカルタ ————— 61

タムリン通り ————— 70

残留者の戦後

78

マグロの刺身

86

薬草園の主

105

トコ・スカムト

119

甘いマンゴの実

132

バカヤロー

144

湿地帯

164

アチエのコーヒー

187

インドネシア

～旅したところの地図～

道

カリマンタン島

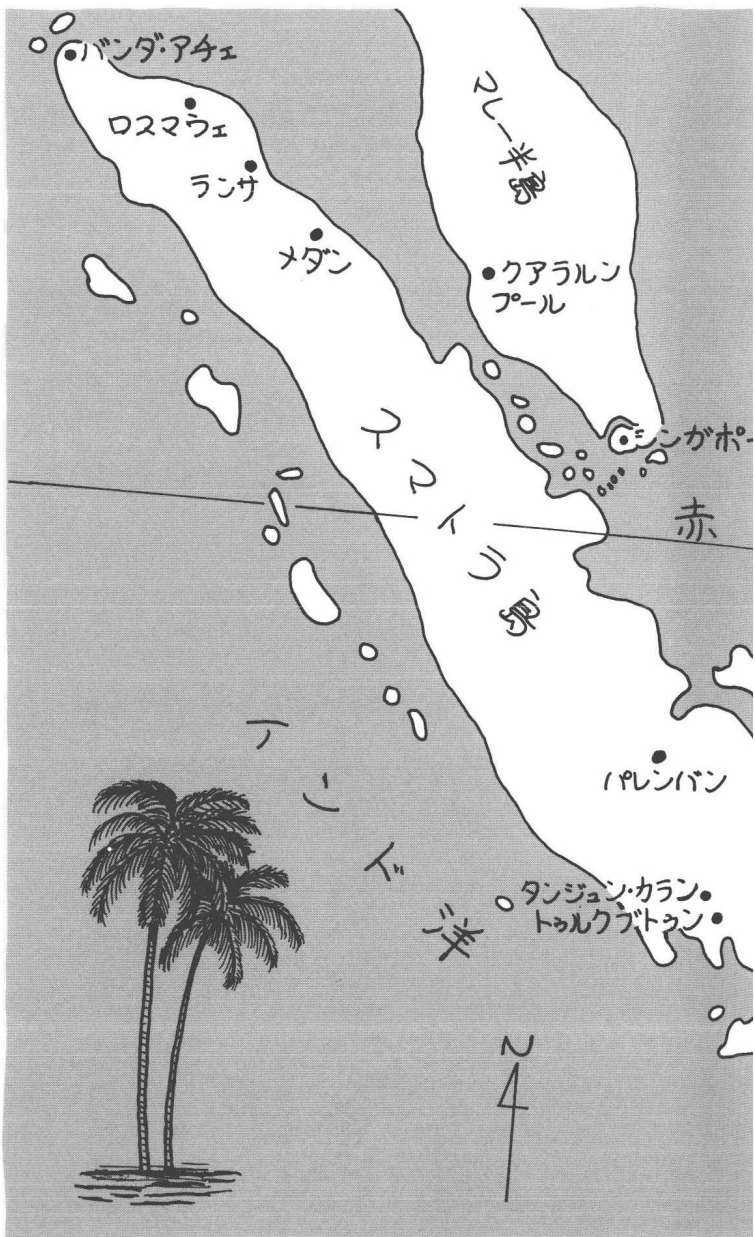
ジャワ海

ジャワ島

- スマラン
- マゲラン
- ジョクジャカルタ

スラバヤ

バリ島



オラン・ジュパン

ジャワ、スマトラ ■ 残留日本人を訪ねて

ミー・バソ

どこから旅をはじめようか――

そう迷いつつ、なんとなく足が向いたのがスラバヤだった。スラバヤはジャワ東部の中心都市である。ジャカルタに次ぐインドネシア第二の都市で人口はおよそ三〇〇万だから、日本でいえば大阪に相当する。首都ジャカルタに対抗意識を持ちつつも到底太刀打ちできないという点も、さらには、ジャカルタの人がスラバヤのことをよく言わないという点でもスラバヤは大阪と似ているといえる。

スラバヤの市内とその周辺には数人の残留者が暮らしている。どこか居心地のいい宿をねぐらに彼らを訪ねようと思い、何軒かまわつてようやくやく探し当てたのがホテル・カルティカである。インドネシアの安宿にはタメ息の出そうなところが多いが、ここはどこも隅々まできれいで、建物自体も少し古いがコロニアルスタイルの堂々としたものだった。天井が非常に高く、ゆったりと空間をとつてある。だから風通しがよくて熱気がこもらず、安宿にクーラーなどないが、その必要もなかった。

